

今シーズンのA群ロタウイルスの解析状況について

＜A群ロタウイルスによる感染性胃腸炎＞

A群ロタウイルスは乳幼児におけるウイルス性胃腸炎の主要な原因であり、ほとんどの人は5歳までに一度は感染すると言われています。

A群ロタウイルスを原因とするものは2～5月にピークをむかえ、6月には沈静化する傾向がみられます。県内では平成26年度4月、5月、平成27年度5月にA群ロタウイルスによる集団感染事例が起っています。

＜A群ロタウイルスの調査＞

ロタウイルスワクチン（経口弱毒生ワクチン）が、2011年から開始されました。ワクチンによる重症のロタウイルス下痢症の予防効果は約90%とされています。そこで奈良県内で、ワクチンがA群ロタウイルスの流行株にどのような影響を与えているかを調査しています。

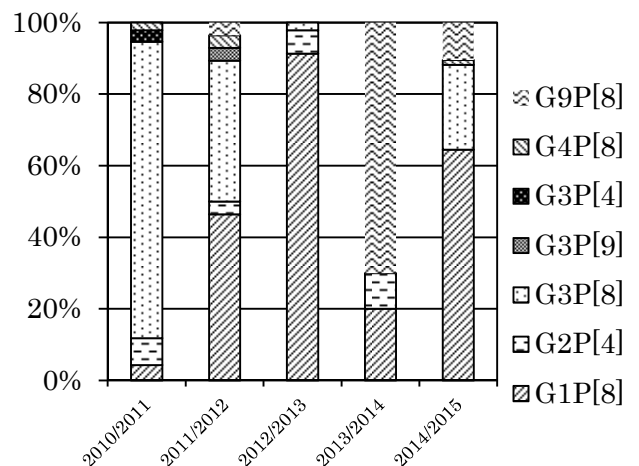
＜調査結果＞

2014/2015シーズンのうち2014年9月～2015年4月までに感染症発生動向調査により提供された感染性胃腸炎患者の検体についてA群ロタウイルスに関する調査を実施しました。

検出したA群ロタウイルスの遺伝子型は、G1P[8]が62.7%、G3P[8]が28.8%、G9P[8]が6.8%、G4P[8]が1.7%で、前年度に比べてG9P[8]の割合が減り、G1P[8]の割合が大きくなりました。患者年齢は2歳代が最も多く1～3歳代で80%以上を占めており、例年と比べて大きな変化はありません。中には、ワクチンを接種している患者が4例（1価ワクチン3例、不明1例）、入院を伴う重症患者3例が含まれています。なお、コクサッキーウイルス、サポウイルス、アデノウイルスに重複感染している例が7例ありました。

ワクチン接種歴のある患者4例はG1P[8]が3例、G3P[8]が1例で、入院を伴う重症例3例はG1P[8]が2例、G3P[8]が1例でした。

G1及びP[8]は、国内で販売されている2種類のワクチンに組み込まれており、G1P[8]の検出は減少すると見込まれていましたが、今シーズンのG1P[8]は検出割合が増加しました。これは一部に遺伝子の変異が起っていることが原因のひとつであると考えています。また、2011年以降検出が少なかったG3P[8]の検出割合も増加し重症例及びワクチン接種例からも1例ずつ検出しています。



今シーズンのA群ロタウイルスによる感染性胃腸炎患者報告は多い様で、特にワクチン接種例や重症例を中心にウイルスの詳細な調査を今後も継続していく必要があると考えています。

ご協力いただいた医療機関には厚く御礼申しあげるとともに、今後とも奈良県感染症発生動向調査にご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

（ウイルス・疫学情報担当）